
夢現

きい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢現

【Nコード】

N9869K

【作者名】

きい

【あらすじ】

お前は私を覚えているか？

いや、覚えていたとしても、きっと私を憎んでいるだろう。なぜなら、私はお前をもう一度殺したのだから。

夢

ばじゅっん。

魔帆良学園の一角から、光が線を描いて薄暗い夜空に向かっていく。光は張られていた結界に当たって、小さな花火を咲かせる。

「ラス・テル・マ・ステル・マジステル 光の1000矢」

ぼーやは休むことなく、呪文を唱え続けていた。

私はその様子を黒いゴスロリに身を包んで見守っている。

ばじゅっん。

新たな魔法の矢も花火のように散っていった。

「よし！ 今日はこちらまでだ」

「はい。ありがとうございました。エヴァンジェリンさん」

また、あのぼーやは。

マスターと呼べと言ってるのに。

だが、不思議といやな気はしなかった。

そんな私の様子が付いたのか、ミニステル・マギ従者が聞いてきた。

「うれしそうですね。マスター」

「バカを言うな。茶々丸」

あのぼーやには

そのうち、“マスター”とよばせてやるさ。

自分でも、不適だと思ふ笑みを浮かべてやった。

忘れていたんだ。

私がたくさんの人を殺したということも。
その中の一人でしかなかった、お前のことを。

やけに幼く見える青年の顔。

そして、流れ落ちる涙。

「はっ」

夢か。

「どうかしましたか？ マスター」

ベットから跳ね起きると茶々丸がこちらを見ていた。
表情はないが心配させてしまったようだ。

「いや、なんでもない」

夢だ。

ただの夢。

だけど、なぜいまさら？

夢（後書き）

マンガ「魔法先生ネギま」以降「ネギま」を参考にしています。
バトルはありません。ヒューマンSSです。

奇立ち

おかしい。

最近のマスターはどこか変だ。

「どうかしましたか？」

『なんでもないと云ってるだろう』

昔のように、暗い影がなくなったものの、ぼんやりしてる回数が多くなった。

今も屋上で寝転んでいるものの、眠ってはいないようだ。

なにか悩みでもあるのかと、私が尋ねても怒鳴るだけで質問に答えられない。

一体何があったのですか？

マスター。

5

くそっ。

イライラする。

それもこれもあの夢のせいだ。

このままでは満足に昼寝もできない。

あの夢を見て以来、私のイライラは納まらない。

茶々丸にもそれは伝わってるようで、何度も同じことを尋ねてくる。

『なんでもないと云ってるだろう』

思わず、大声を出してしまう。

これでは八つ当たりだ。

冷静にならないと。
冷静に。

「なあ、エヴァ。オレはどうして」

くっ………。

くそっ。

どうして、忘れられない。

そう、あれはサウザンドマスターに出会うより、はるかに昔。
もう400年も前の出来事だ。

レーベンスシュルト城。

ただの古びた城。

それが第一印象だった。

ただのきまぐれ

ほんのきまぐれだった。

住みやすそうな住処を求めて、彷徨っているときにたまたま見つけた古びた城。

人が住んでいるとは思えず、城の中に入ってしまったのだ。

「何をためっている？ 早く殺せ！」

「はいっ。隊長」

城に侵入するや否や、城を守る兵士たちが私に襲い掛かってきた。

まあ、勝手に侵入した私が悪かったのだが、それで殺されるどおりはない。

「貴様が隊長だと？ 笑わせるな。ただのタヌキだろう？」

隊長を名乗る小太りの中年は後方で命令するだけで、戦うつもりはないらしい。

” まずは貴様から殺してやろう。”

私は他人任せの奴が一番嫌いなんだ。

ある程度殺し、奥の部屋に入ってみると、青年が長い机に寄りかかのように倒れていた。顔は前髪で隠れてしまっってよく分からないが、髪が透き通るようなきれいな金髪なのでおそらく二十歳前後だろう。

「若造。 。 してやろうか？」

おそらく聞こえてないだろうが、横たわる青年につぶやいてみた。

分かっていた。

こんなことをこやつは望んでないかもしれない。

ただのきまぐれだ。
ただのきまぐれであり、自己満足だった。

それが、クロードとガンナーとの出会いだった。

「あの、マスター？」

「ああ、なんでもない。それよりもぼーや。続ける」

「はい！」

本当にどうかしてる。

ただのきまぐれ（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

PVが1日で1000超えました。

びっくりしました。

びっくりしすぎて、思考が一瞬止まりました（笑）

これからも、よろしくお願いします。

幸せ

最近、よく思い出すんだ。
お前のことを。

どうしてなのか考えてみた。
そして、分かった。
感じているんだ。光というやつを。

だから……なんだろうな。
思い出すのは。

「ふざけるなよ。ガキ！ 何でお前がマスターなんだ！」

「ガキではない。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだと言
っているだろう」

「名前なんてどうでもいい！ だから、何でお前が主マスターなのか聞いて
るんだ！」

ああ、うるさい。
目覚めてから、ずっとこんな感じだ。クロードは顔をしかめて私を
怒鳴り続けている。

しかし、優しい顔立ちをしているため、顔をしかめてみても老けて
見えるだけで大して怖くも無かった。

「助けてやったんだ。当たり前だろうが」

「うっ。なんで、ガキの面倒なんて」

「聞こえてるぞ」

“美女だったら良かったのに”とぬかしている若造に対し、私は睨みをきかす。

しかし、幼い子供の姿であるせい、まったく効果がなかった。

それにしても、おかしな若造だ。

私が真祖の吸血鬼だと言っても、大して怯えもせず“ああ、そう”の一言で済ませてしまった。

もしかしたら、信じてないだけかもしれないが。

痛み

心配するな、ぼーや。

私が協力してやるのだから、すぐにでも見つかるぞ。

それにしても、知らなかった。

まさか、あのぼーやも苦勞を背負っていたとは。

他のガキどもと同じように、苦勞知らずなのかと思っていた。

『痛つてー』

「いちいち騒ぐな！ 馬鹿者」

クロードの頭を思い切り叩く。はた

こやつはなんだって、手を切るたびに騒ぐんだ。

「だいたい、血は出てないんだから、騒ぐんじゃない」

「んなこと言つても、慣れてないんだから仕方ないだろう？ 剣しか振りまいたことがないんだから」

2人分の料理を作るには大きすぎる調理場で、クロードはぶつぶつと文句を言いながら、材料を切っていく。

「なあ、エヴァ」

「なんだ？」

「何で、オレは血が流れないだろうな」

なっ！？

危なく声を出してしまう所だった。

血が引いていくのが分かる。

「手を切ったくらいで、血など出るか」

「そうか」

できるだけ、平穩に対応したおかげか、クロードはそれ以上追及してこなかった。

いささか、疑問を抱いているようだったが、深く考えないタイプらしい。

強くなれ

「助けなくていいでござるか？」

「ああ、かまわん。これはぼーやにとって修行になる」

ヘルマンとやらに一法的にやられているが、死にはしないだろう。

もし、死にそうになれば、手助けしてやらなくもない。

鍛えているから、ありえないだろうが。

強くなれ、ぼーや。

誰にも殺されないように。

クロードはいつものように長い机を念入りに掃除をした後、その机をまじまじと見つめていた。

それから、奴は私と机を交互に見つめてから、真剣な眼差しで私に尋ねてきた。

「なあ、エヴァ。お前何か隠してないか？」

まさか、気づいたのか？！

まあ、気づかない方がどうかしている。

10年間ずっと変わらない姿をしていれば、誰だっておかしいと思うだろう。

だけど、私にとってはあまりに突然の出来事だった。

いつもの通り、食事を作り、掃除をして、家事をこなす。

本当に何もかもが、いつも通りだったんだ。

「ほら、なにをしてるんだ。食事がまだだぞ！」

その違和感に気づいて欲しくなくて、私は慌てて話を変えた。

「ごまかすな、エヴァ。答えろよ」
奴は今にも泣きそうだった。

「おお、ネギ坊主が勝ったでござるよ」

「ふん。とうぜんだ。私が鍛えてるんだからな」

“^{おまえ}楓も鍛えてやるつか？” と言おうとしてやめた。
めんどくさい。

権利

ナギに会えたというのに、心は暗い。
怯えさせるために話したことも、逆に励まされてしまった。

“ 幸せになれる権利 ” か。

あの明日菜はバカなことを言う。
幸せになれる権利などとうに、失っているというのに。

思い出して欲しくなかった。
だから、必死に隠していた。

「ほらほら、ここにも埃が残っているぞ」

「てめーは姑か！」

ついつと長い机をなぞると指が汚れる。

怒る暇があるなら、手を動かしたらどうだ？

「だいたい、こんなに広いだから、少しくらい汚れててもいいだろ
う」

「気持ちの問題だ」

たしかに城だけあって、やたら広い。

すべてをクロード一人で、きれいにしようとするれば日が暮れる。

「ああ、剣が振りてー」

「だめだ！」

「ちえ。オレが剣を振りたいうって言うと、やたら焦るよな」

振らせる訳にはいかない。

大怪我をすれば、気づいてしまうから。

「なにをしている？ 神楽坂明日菜？」

「うるさい。ほっといて」

・・・真剣に考えていたというのに。
馬鹿馬鹿しくなってしまった。

答えたくない

「なあ、お前は生き返りたいと思うか？」

「えへえ」

びっくりしました。

エヴァさんが私に声を掛けてくるなんて。驚きのあまり変な声を出してしまいました。

「驚いてないで、さっさと答えんか！」

「はっ、はい。そうですね。生き返りたいとは思いませんけれど、気が付いて欲しいです」

「そうか」

「あの、生き返れるんですか？」

？

あれ？

「あの、エヴァさん？」

黙ったまま、固まっているエヴァさんを下から覗き込む。

霊体なので、木の枝に座っているエヴァさんでも簡単に覗き込めません。

『……………出来るわけないだろう』

「あっ、ちよっと」

いきなり叫んだと思えば、走り去って行ったエヴァさんに呆気にとられる。

どうしたんでしょう？

何か気に触ることを言ったんでしょうか？

泣いてました。

「やはり答えなくてはだめか？」

「ああ、教えてくれ。あの日あったことを」
答えたくない。

それが正直な気持ちだった。

忘れたままでいいだろう。

そう言いたかった。

番外編 - 従者 - (前書き)

クロード視点

番外編 - 従者 -

「やっと、目覚めたか」

目を覚ますと金髪で黒いワンピースに黒いマントを羽織った幼女^{ガキ}が目の前にいた。

「お前は誰だ？」

なんだ？

今、ガキが一瞬泣きそうな顔をした。

「喜べ、お前は今日から私の従者だ」

「はっ？」

なんだって、このガキは室内でマントなんか羽織ってるんだ？
などと、どうでもいいことを考えていたら、ガキは聞き捨てならぬことを言った。

なんて言いやがったんだ。このガキは？

「なんだ聞こえなかったのか？」

「いや、聞こえたんだが、もう一回言ってくれないか？」

「いいだろう。お前は今日から私の従者だと言ったんだ」

ガキは腰に手を当てて、さきほどと同じ言葉を吐いた。

どうやら、聞き間違いではないようだ。

これは何の罰だ？

「ふざけるなよ。ガキ！ なんでおまえが主なんだ」

美女だったらともかく、なんでガキのいいなりになんか冗談じゃない。

「助けてやったんだ。当たり前だろうが」

そうなのか？

よく覚えてないが、オレはこいつに助けられたらしい。

それにしても、ガキに助けられるというのは、一体どんな状況だったんだ？

たしか、オレはこの城の副隊長^{兵士}として……。

ずきり。

なんだ？

オレは何か大切な事を忘れている気がする。

何を忘れてるんだ？

涙

クロードは事実を忘れていた。

私はその事実を言いだせなかった。

いや、言わなかったのは私自身のためだ。

責められるのが怖かったんだ。

「なあ、エヴァ。オレはどうして 生きているんだよー！」

「ついに思い出してしまったんだな……」

机の上に寄りかかるように、倒れていたお前を見てすぐに分かったよ。

これはすでに殺されていると。

そして、助けられないことも。

同類だと思った。

命を狙われ続けていた私と同じだと。

だから、魔法をかけてやったんだ。

「生き返したのか？ オレを」

「無理だ。人を生き返すなど」

「じゃあ、何の魔法をかけたんだよ」

「“実体化”だ」

「実体化？」

「そう、霊体に感覚及び、人に見えるようにする魔法。つまり今のお前は“幻”なんだ」

「そんな」

よほどショックだったのだろう。
膝を突いてしまった。

「なんで………なんで、そんなことしたんだよ。オレはもう
一度死ぬのかよ！」

クロードはぼろぼろと泣き出した。

幻でしかない体から涙が溢れ落ちていく。

その顔はやけに幼くて、痛々しかった。

涙（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます

望み

何も言えなかった。
言えるはずがなかった。

今のクロードの姿は私が勝手にやったことだ。
望んでもなかったことをされれば、誰だって怒る。
ましてや、“幽霊なんだから、消えなければいい”などと軽々しく
言えるはずがない。

どのくらいの間が過ぎただろうか。
私もクロードもお互い黙ったまま、過ごしていた。

「…………お前は死なない。消えなければいいだけだ」
『それで、生きているって言えるのかよ!』
強く睨まれた。

今まで、何人も人間に睨まれてきたはずなのに、ひどく痛かった。
痛くて痛くて、心臓が握りつぶされそうだった。

「たしかに、消えなければ永遠に生きていられる。けれど、オレは
一度死んだんだ。」

”もう死んだんだよ”
その気持ちがあるのに、それは生きているって言えるのかよ!」
どうして、思い出してしまったんだ。

思い出さなければ良かったのに…………。
奴の涙を見ながら、そんな勝手なことを思っていた。

『もう、頼むからオレを殺してくれ！』
その言葉がやけに耳に残っている。

望み（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

評価ポイントをくださった方も、ありがとうございます。

初めて評価ポイントをいただきました。

びっくりしすぎて、思考が2回止まりました（笑）

これからもよろしくおねがいします。

城

久しぶりにこの城を出したな。

もしかしたら、私はあの思い出から、逃げていたのかもしれない。
外装は何一つ変わっていない。

もしかしたら、昔よりきれいかもしれないな。

内装も変わっていない。いや、変えられなかった。

改めて、あの机を撫で回すように眺める。

年月が経ってるせいで、色が変色してしまっている。

これを一人で、使うには長すぎるな。

「クロード」

そう、つぶやいた声はもうどこにも届かない。

「分かった」

私は大理石の床に膝を突き、手を付いて涙を流し続けるクロードの
前に立った。

何をためらっているんだ？

わたしは………。

「っ」

呪文が唱えられなかった。

今まで、たくさん人を殺してきたというのに。

言葉にもなっていない声を出して、奴の前に突っ立っていた。

ぼたぼたぼた。

年季の入った机の上に雫が溜まっていく。

泣いているのか？

私は………？

バカな。

私は悪い魔法使いだぞ。

その私が泣くはずがない。

泣くはずがないんだ。

城（後書き）

お気に入り登録&評価ポイントありがとうございます。

みなさまのおかげさまでPV1万超えました。
ありがとうございます。

零

「マスター」

「茶々丸！ 貴様、いつからそこにいた？」

いつの間にか、茶々丸が私の背後に居た。

私は慌てて、頬を流れる雫を袖で拭き取る。

こういふときは、そっとしておくものだろう。

「すみません。声が聞こえたものですから」

「聞いていたのか？ 全部？」

こうなったら、見られていたことはどうでもいい。

内容を聞かれてないかを確かめる。

「はい」

「そうか」

全部聞かれていた。

もう、ごまかしは効かないな。

「……聞いてのとおりだ。私はクロード＝ガンナーを2度も殺したんだ」

「なにしてるんだよ。……早くしろよ。早く殺せよ！」

“お前がやったんだろう”
分かっている。

そんなことは分かっている。

分かっているのに。

「……………リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　この者に

永遠とわの眠りを」

「　たくっ」

！

クロード……………？

温かな雫が頬を流れていく。

そして、床にぽたぽたと雫が落ちる音が聞こえてきた。

これは涙ではない。

私は悪だ。

悪は泣いたりしない。

後悔なんてしないんだ……………。

だから、これは涙ではない。

けして。

零（後書き）

お気に入り登録&評価ポイントありがとうございます。
うれしいかぎりです。

本当にありがとうございます。

番外編 夢の終わり

水の音が聞こえる。

ぼたぼたと不気味な音を立てながら、水は絶え間なく落ち続けている。

これは血なのか……？

床にだらりと伸ばした右腕から、血が流れ落ちていくのが見える。手のひらは既に赤く染っていた。

「ようやく “死んでくれるのだな”」

薄れゆく意識の中で、にやりと笑う男の口元がうすうすと見えた。その言葉をきっかけに、全身が徐々に血まみれになっていく。

これはただの悪夢だ。

ずっとそう思っていた。

それでも、怖くてたまらなくなった。

不安でしかたなかった。

この繰り返し返される悪夢が何を意味しているのか？

それが分かるまで、ずっと得体の知れない恐怖に怯えていた。

そして、思い出した。

自分がもう死んでいることを。

いや、殺されていたことを。

恐ろしかった。

もう一度、あんな身の毛がよだつような思いをするのかと思つと、怖くて怖くてたまらなかった。

本当はエヴァに掴み掛かつてでも、問い詰めたかった。

“ どうして、こんなこと 生き返したんだ ” と。

けれど、まるでしかられた子供のような顔して、オレを見つめるエヴァに対して、そんなまねはしたくなかった。

だから、頼むエヴァ。

お前を完全に憎む前に殺してくれ。

番外編 夢の終わり (後書き)

クロード視点

永遠

「クロードさんはマスターを憎んではいませんよ」

「………なんで、そんなことが分かる？」

「もし、憎んだまま逝ったのなら、笑っては逝ったりはしません」

！

「たくつ、泣くなよな。くそガキ」

思い出した。

奴の最後の笑顔を。

消える瞬間、奴は確かにそう言って笑っていた。

『クロード』

すまない。

すまない。

すまない。

すまない。

お前はこんな私を許してくれていたのだな。

ようやく、私の罪が消えた気がした。

「マスター。クロードさんはマスターが忘れなければ、永遠にマスターの中で生き続けていますよ」

「そうだな。だが、私はそんな面倒なことはしない。このまま忘れてやる」

あいつは永遠を嫌がっていたんだ。
そんなことはしたくない。

だけど、またいつか思い出してやる。

静かだった。

一人きりになった城で、私は一人泣いていた。

周りには誰もいないはずなのに、声が聞こえた気がした。

「クロード……?」

きっと、気のせいだ。

あいつが私にそんなことを言うはずがない。

「ありがとうな………楽しかったぜ」

永遠（後書き）

たくさんの方に読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9869k/>

夢現

2010年10月11日09時26分発行